

遺族から三千冊が

市立図書館に寄贈

小さな灯

人間というものは
なにか過ぎさつていくもの
ではないか
対いあつていても
刻々に離れていることが感
じられてくる
眼をつむると
遠い星のひかりのようにな
つかしい
その言葉も その微笑もな
ぜかはるかな彼方からくる
二人は肩をならべて歩いて
いる
だが明日はもうどちらかが
この世にいない
たれもかれも孤独のなかか
ら出てきて
ひと知れず孤独の中へ帰つ
てゆく
また一つ小さい灯が消えた
それをいま誰も知らない

詩集「魂の中の死」から

300冊(右の写真)の中に、嵯峨信之ご本人の詩集は5冊しかなかった。訂正も書き込まれている。

向こう側の死を探求

柏市光ヶ丘に住んだ詩人の故嵯峨信之(さが・のぶゆき)のご遺族から約三千冊の蔵書の寄贈があった。柏市中央図書館では、このうちの三百冊を開架の棚六段に収めて公開している。明治三十五年(1900)に宮崎県に生まれ、平成九年(1997)に九十五歳で亡くなった詩人は、「現代詩人賞」や「芸術選奨(文部大臣賞・文学部門)」を受賞しており、七冊の詩集を残している。

「怒濤の二十世紀を自ら肌で感じ、川岸の向こう側へ渡っていく死を探求し続けた(河野龍彦)」と言われており、その魂の詩は、難解さを持ちながら、身近に親しさがある。

三百冊の中に、見落としがなければ、上掲写真の五冊の詩集がある。この五冊を読み解き、鑑賞しながら、表と裏に三つの詩を紹介した。これだけで嵯峨信之の詩の片鱗もつかめないが、やむをえない。中央図書館で、「川岸の向こう側」を覗く詩の世界は開かれている。

「愛と死の数え唄」

一九五七年

「魂の中の死」

一九六六年

「開かれる日、閉ざされる日」
一九八〇年
「土地の名／人間の名」
一九八六年
「小詩無辺」
一九九四年

末広クラブ・逆井漫步92 平成18年5月

